



## ～市道岱明玉名線建設に伴う発掘調査成果～

令和3年6月に全面開通した市道岱明玉名線の建設工事に伴って発掘調査を実施しました。この路線の中央から北側は弥生時代を中心とした塚原・木船西・大原遺跡の範囲に含まれています。

平成22年度から平成24年度にかけて発掘調査した塚原遺跡の概要を報告します。

## ■弥生時代中期

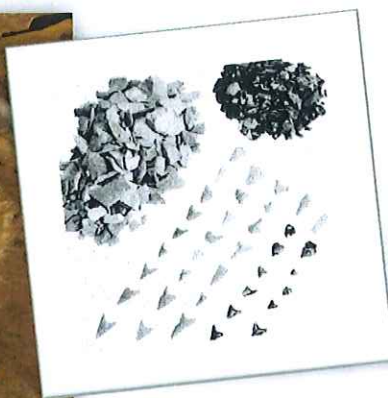
～県内最大級の大型円形建物跡や甕棺墓群、それらを区画する溝



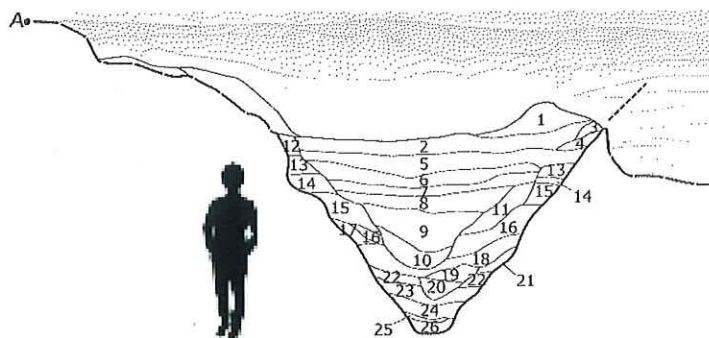
### ▲大型円形建物跡 (S111) と石鏃など

調査区北側においては、弥生時代中期の大型円形建物跡が6基確認されました。そのうち S111 は直径が 11m もあり県内最大級です。

塚原遺跡の場合、円形の大型建物から石鏃や剥片が多量に出土していることから、石器製作の工房（作業場）の可能性も考えられます。



▼調査区の中央付近には、幅 5m、深さ 2.5m の溝があります。北側の生活域と南側の墓域を分ける溝とみられますが、断面が V 字形をしていることなどから防衛的な役割もあったと考えられます。



塚原遺跡の V 字形の溝と当時の弥生人の大きさ





塚原遺跡出土の甕棺墓 (S351)

約2000年前の  
弥生人じゃ！

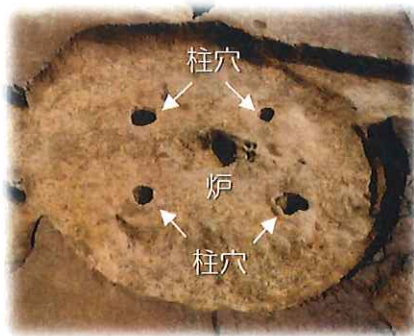


塚原遺跡出土の甕棺墓 (S363)

溝の南側は墓域だったとみられ、弥生時代中期の甕棺墓が21基検出されました。これらの甕棺は帯状に集中しており、東側では大型棺を中心に南北方向の2列に配置されています。このうち2基の甕棺は人骨が良好に残存しており、調べた結果、いずれも熟年の男性で高身長ということがわかりました。

## ■ 弥生時代後期～終末期

～変わる住居スタイル、そして古墳時代へ～



弥生時代中期 (S17)



弥生時代後期 (S194)

ベッド状遺構

### 塚原遺跡における住居形態の変化

弥生時代後期になると、住居の形態が円形から方形へと変化します。後期の竪穴住居跡は8基確認されました。いずれも東西方向に長く、中央に炉、それを挟むように2本柱という形で、壁際にベッド状遺構を持つという共通性があります。また、南側が入口だったと考えられます。

### 弥生時代終末期の遺構と遺物



S141 出土の土器



竪穴遺構 (S141) の土器出土状況

調査区南側では、弥生時代終末期の竪穴遺構、溝などが確認されました。

こんな土器も出たよ！



溝 (S136) 出土の舟形土器

古墳時代編へと続きます…